

環境教育の視点に立った「田んぼの学校」

滋賀県立能登川高等学校

中村 治 一

1 「田んぼの学校」のこれまでの経緯

1-1 「田んぼの学校」の前身

農業の近代化に疑問を感じる人たち、絶滅を危惧される生き物たちを憂う人たち、生産者と消費者・都市と農村・大人と子どもたち・学校と地域の人たちとのつながりの回復を望む人たち、田んぼに癒しを求める人たちによる、田んぼを中心にすえた多くの営みが行われてきた。

これらの営みは、1998年「田んぼの学校」研究会が発足してから「田んぼの学校」と言われるものである。そのような「田んぼの学校」以前の営みには、必ずしもはっきりとした目的をもたないことが多いが、結果として農業体験・自然体験・勤労体験・交流・癒しなど多くの成果をもたらすことで注目を集めるようになった。環境問題が重要視されるにつれ、表2-1-1に示すように「田んぼの学校」は目的が明確になり、発展してきている。

表1-1-1 「田んぼの学校」をはじめのきっかけ

宇根豊著：「田んぼの学校」入学編より

| | キーワード | きっかけ | いいこと |
|----|-----------|------------------|---------------|
| 1 | 小学校 | 学校は地域との接点をさがしている | 先生の目が地域に向く |
| 2 | 中学校 | 心を開放させる場はないか | 身近な自然が温かい |
| 3 | 産直交流 | 生産現場を見せたい、見たい | 食べ物の価値が変わる |
| 4 | 子供会 | 田んぼは近寄りにくい | 新しい遊びの場を発見する |
| 5 | PTA | 知らない世界に目を向けさせたい | 親の目も田んぼをとらえ直す |
| 6 | 自治会 | 子どもたちに伝えたいものがある | 伝統の意味が体で分かる |
| 7 | 農協青年部 | 新しい百姓の運動スタイルだ | 青年は既成概念を恐れない |
| 8 | 土地改良区 | 土地改良区も視野を広げたい | イメージアップ |
| 9 | 都市との交流 | 都会人には田舎はあこがれみたい | 結構もうかる |
| 10 | トンボ池 | 田んぼは見事なトンボ池だ | トンボとりが復活 |
| 11 | 環境教育 | 赤とんぼはなぜ田んぼで生まれるか | 自然の意味がわかる |
| 12 | グリーンツーリズム | 田舎がトレンド | 百姓仕事がトレンド |
| 13 | ピオトープ | 田んぼはピオトープなの | ピオトープも手入れが肝心 |
| 14 | 自然観察 | 田んぼの自然を知らないではね | 自然の宝箱 |
| 15 | 総合学習 | へえー、こんなカリキュラムがね | 発想が変わる |
| 16 | 地域活動 | 住めば都と言えなくなってきた | 何を残し何を復活させるかだ |
| 17 | 文化伝承 | 楽しむから文化は伝わる | しめ縄つくってみよう |
| 18 | 食農教育 | 農業の意味が変わってきたの | 食べものの価値も変わった |
| 19 | 地球環境 | ミジンコから地球を見るのもいい | 人間なんて、困りもんだね |

1-2 「田んぼの学校」支援事業とその目的

「田んぼの学校」事業は、文部、農水、国土3省庁が1998年、有識者を集めて設置した「田んぼの学校」研究会の提唱で始まった。豊かな自然と独自の文化を持つ農村の「多面的機能」を、教育に生かそうというのが狙いである。子どもたちが触れ合う機会が少なくなった田んぼや水路、ため池、里山などを遊びと学びの場に活用する環境教育「田んぼの学校」が、注目を集めた(図2-2-1)。農水省の関連団体農村環境整備センターでは、農家や行政関係者、教師の中からその指導者を養成するための研修を行っている。

農家にとっては、自分たちの持つ知識が子どもたちの教育に生かせる上、都市住民とつながりも持てる。一方、子どもたちに環境教育として農村生活を体験させたいと考える親も多くなっており、その両方の需要を結びつける仕掛けが「田んぼの学校」である。同センターの1998年度の調査によると、田んぼを使った学習活動の場は全

国に約 1500 ヶ所あり、徐々に広がっているという。特に近年活動を始めた「田んぼの学校」はこの流れをくむものが多く、「田んぼや水路、ため池、里山などを遊びと学びの場に活用する環境教育」がその目的に掲げられている。

同センターの「田んぼの学校」に関わる事業は、指導者養成研修、支援事業(助成金制度)、企画コンテスト、田んぼの生き物調査(環境省・農水省の連携)などである。基本は農業の多面的機能の高揚にあるが、そのための環境教育に力を入れている。

「田んぼの学校」ってな〜に?

「田んぼの学校」は、田んぼや水路、ため池、里山などを遊びと学びの場として活用する環境教育です。

古くから農業の営みの中で形づくられてきた水田や水路、ため池、里山などは、今では農村の自然環境の重要な要素となっています。「田んぼの学校」は、これらを遊びと学びの場として活用することにより、農業農村整備事業で整備した農地と土地改良施設への理解を深めると共に、農村の持つ多面的な機能を通して、環境に対する豊かな感性と見識を持つ人を養成していくことをねらいとしています。

- 子供たちは…のびのび遊ぶ。むらの自然と生活に触れ感性を育む。
- 大人たちは…子供と共に遊び、学ぶ。自然への感性を取り戻す。
- むらの人は…むらの生活に誇りを持つ。農業やむらのこれからを考える。
- まちの人は…むらのすばらしさを知る。農業や農村の大切さを理解する。

図 1-2-1 農村環境整備センターHP より

2 耕さない「田んぼの学校」

滋賀県近江八幡市立北里小学校 5 年生の総合的学習の時間に、耕さない「田んぼの学校」を実施している。私の提案で、4 年前から不耕起による体験を行っているが、地域のグループ「メダカの学校」小田分校の協力を得て実現することができた。詳細は、資料 を見ていただきたい。

この「田んぼの学校」は、農業体験・勤労体験にならないように工夫されている。環境教育のプロセスには、「探検」「発見」「ほっとけん」の 3 つの発達段階があり、小学校では「探検」から「発見」にステップアップしたい。学習目標はあえて設けず、遊びの延長として学びにつなげたい。現代人は、自然に直に触れる機会をなくしている。子ども達が田んぼという自然の中に身をおくことは意義が大きい。

田植えのとき、田んぼに足を踏み入れることは、子ども達には画期的な出来事である。田んぼは「危ない所」というのが親からのシツケである。長靴を履いて恐る恐るの田植え作業も、しばらくすると長靴を脱ぎ捨てる子が出てくる。米糠や草取りの作業では、全員が素足で土の感触を楽しんでいる。この頃から隣の慣行田との違いを感じ始める。「先生 静かにして、耳をすませてみ。 ザワザワと生き物の声がするで。」というのは、子ども独自の感性によるもので印象的である。

その後の農作業は、慣行のものとの違いを強調し、稲作文化の歴史が実感できるように工夫されている。古来の道具や身近な物を使って、手で直に触れることにした。

3 多様性の教育(まず、「ただの虫」の発想へ ~ 次に、害虫も含めた多様性へ)

北里小学校で実施されている「田んぼの学校」では、2 月に保護者を招き「シンポジウム」を開いている。「田んぼの学校」の学習の成果をまとめ発表する場である。収穫を終えた 10 月には、そのまとめ活動の導入として、私が授業を行っている。

授業の内容とねらい

田んぼの中での食物連鎖(生物多様性)を生かす稲作が可能だということを伝えることが、最大のねらいである。川と田んぼをつなぐこと、冬にも田んぼに水をはること、この 2 つが大きなポイントで、実現すれば日本が失いつつある環境(自然)を取り戻せるのだという訴えがある。

アンケートの結果から

授業の前後に資料のようなアンケートを実施した。その結果について若干の分析を試みた。

田植えから稲刈りまで不耕起の田んぼで体験してきた子ども達には、耕さない方が良いと答えるのは、最初から予測できることである。生き物が多くいることからくる安心感がこの結果につながっている。

〔5〕生き物が田んぼに必要なだという考えは、体験から実感として子ども達が獲得したものである。ただ、生き物全般は肯定していても、自分に都合の良いものに限定していると考えられる。益虫・害虫・それ以外という分類は、子ども達が好感をもつ生き物かどうかの分類とずれがあることが見受けられる。益・害の新しい概念をもちこんだこの授業の前後でどう変化したのか、興味のあるところである。田んぼの中の食物連鎖をさらに新しい概念としてもち込まれ、混乱した子どもがいるかも知れない。

生き物全般には肯定的でも、ただの虫(益虫・害虫以外の生き物)には少々きびしい評価になっている。害虫も田んぼには必要だと教える教育は、一般的には批判を受けるところである。今後のまとめ活動の中で整理されることを期待したい。

現代人には、「科学技術は何でもできる。今はできなくても将来できるようになる。」という勘違いがある。科学技術の進歩によって何とかなるだろうという楽観視が、環境問題に真面目に取り組めなくしている。害虫対策をどうするかという問いに、「人間に無害な農薬をまく。」と多くの子が答えるのはこのためである。どれだけ科学技術が進歩しても、人間にだけ無害な化学物質は有り得ない。行政の基準値政策では、解決できない問題である。現代科学の弱点は、人間に対する有害な部分だけを取り除こうとして、有益な部分も同時に取り除いてしまうところにある。

4 環境保全型農業から環境創造型農業へ

2000年以上の稲作の継続によって、日本特有の自然環境は維持されてきた。絶滅危惧種の多くは、水田がなくなれば生存できなくなる。生物多様性が損なわれてきた原因は、次のように考えられる。

- ・圃場整備による用排水が分離されたことと排水路が深くなったこと。
- ・乾田化により土壌生物が減少したこと。
- ・一斉防除や除草剤の多用による生き物全般が減少したこと。

生物多様性が失われることによって、結果として次のようなことが起こる。

- ・稲の病気に対する耐性が低下し、さらに多くの殺菌剤や殺虫剤の投与が必要になる。
- ・生き物による栄養の循環がなくなり、さらに化学肥料の投与が必要になる。

また、生物多様性とは別に次のような問題が頻発している。

- ・乾田化により窒素の溶脱がおこり、排水の汚濁が起こる。
- ・乾田化により土壌中の重金属が浮上し、カドミウム汚染米が増えている。

益虫が生存するためには、ただの虫の存在は重要である。ただの虫の分類は、農薬を効率的に使用し使用量を減らそうとする立場から生まれた。これは、環境保全型農業の立場である。

田んぼの中の物質の循環としての生き物の多様性を、稲の生育に利用しようとする立場からは、害虫・益虫・ただの虫の分類はあまり意味をもたない。害虫が田んぼには必要であるという発想は、生き物の多様性を大事にする立場から出てくる。これが、環境創造型農業である。

5 まとめ

多様性の教育とは、持続可能性の教育に通じるものである。多様性とは、生き物だけのものではない。人権教育・平和教育などにおいても、多様性を生活文化に生かそうとする発想は大変重要である。

〔参考〕持続可能性のための教育へ (テサロニキ宣言) (1997年)

「持続可能性のための教育は、持続可能な未来を達成するための手段として考えられ、人口、貧困、環境劣化、民主主義、人権と平和、開発と相互依存などの概念に関係して、統合するようなものとして捉えられた」

「持続可能性のための教育という広い概念発展においては、環境教育の経験から多くのことを学ぶことができると認識された」